

フォーラム

「西洋古典学とデジタル・ヒューマニティーズ」

趣旨説明

周藤 芳幸（名古屋大学）

司会

川本 悠紀子（名古屋大学）

報告

石田 真衣（近畿大学）

岩田 直也（名古屋大学）

河島 思朗（京都大学）

コメント

小川 潤（東京大学／CODH）

全体討論

2023年6月4日（日）

日本西洋古典学会 第73回大会

於 獨協大学

(趣旨説明)

周藤 芳幸 (名古屋大学)

本企画のタイトルを目にされた会員の多くは、思わず $\gamma\lambda\alpha\upsilon\kappa' \epsilon\iota\varsigma \text{ Αθήνας}$ と呟かれたことであろう。というのも、古典学がデジタル・ヒューマニティーズ (以下、DH) の旗手であることは周知の事実であり、Perseus や PHI といった古典的なリソースから、The Stoa のようなレビュー・ブログ、さらには The Digital Classicist のようなウェブ上のコミュニティにいたるまで、日々の仕事のなかで DH の恩恵に浴していない西洋古典学の研究者はおそらく皆無だからである。また、より広く人文学一般における DH の多様な方法と技術については、小風尚樹他『欧米圏デジタル・ヒューマニティーズの基礎知識』(文学通信 2021) に詳しい紹介があり、そこでは小川潤氏や吉川齊氏によって西洋古典学に特化した有益な情報も提供されている。さらに、国の学術施策に目を転じるならば、コロナ禍を追い風とする DX 推進の流れのなかで、たとえば「統合イノベーション戦略 2021」では、人文学については総合知の創出と活用を目的としたデータ駆動型の研究による研究活動の高度化の加速が謳われている。しかし、果たして西洋古典学研究の未来に向けて、DH はどこまで、あるいはどのような意味で「魔法の杖」と言えるのだろうか。

DH の技術開発の専門家を別とすれば、多くの研究者にとって、DH とは何よりも自らの研究の創造性を高めてくれるもの、すなわち、これまでの自らの研究に新たな視点や変革をもたらしてくれるものでなければ、意味がないであろう。そのような DH の活用に向けて、西洋古典学の研究者として、私たちはどのように DH と付き合っていくべきなのか。このような問題関心のもと、パネルディスカッションでは、哲学、史学、文学のそれぞれの分野で活躍している中堅・若手の研究者と DH に造詣の深い研究者をパネリストとして、西洋古典学と DH との関係についてフロアの参加者とともに再考してみたい。

(報告要旨)

パピルス・アーカイブと歴史研究

石田 真衣 (近畿大学)

エジプトから出土する豊富なパピルス文書は、古典古代史研究の基礎資料として活用されてきた。本報告では、パピルス学・歴史学研究の立場からデジタル・ヒューマニティーズの取り組みを整理し、一ユーザーである発表者の個別研究を視座としながら、歴史資料のデジタル化とその活用方法について多面的に考えてみたい。

デジタル・アーカイブ化が進展して久しい昨今、有用なデータベースの相互利用環境としては、とりわけパピルス文書 (およそ前 8 世紀～後 8 世紀) を中心とする史料

(メタデータ)とその関連データベース(文献・人物・地名など)を提供する Trismegistos が挙げられる。この統合データベースは当該分野の基本的検索ツールとして広く利用されており、包括的なオンラインリソースの拡充に向けた運営側の取り組みとその更新の頻度には目を見張るものがある。

発表者はヘレニズム・ローマ期エジプトにおけるギリシア語およびエジプト語のパピルス文書(特にドキュメンタリー・パピルス)、オストラコン、碑文を主史料として、エジプト社会の変容過程を追究している。その史料調査(数量や地理的分布、二次文献など)や、アーカイブ(古代において収集・保管された文書群)単位/個別の史料分析においては、Trismegistos をはじめとするデジタル資料を常時活用している。本報告では、発表者自身の研究実践における現状とこれからの課題について紹介する。他方で、原史料へのアクセスが依然重要であることに変わりはない。デジタル環境を研究プロセスとして確立させ、新たな視点を獲得するためには、どのような手法があるのか、テキストの性質やデータの関係性に着目しながら検討する。

さらに、デジタル・ヒューマニティーズと歴史学の協働の観点から、多様な教育プロセスの可能性や開かれた歴史への貢献について検討する議論の端緒を開くことを目指したい。

AI チャットボットの古典研究への応用可能性

岩田 直也(名古屋大学)

AI チャットボットの ChatGPT が 2022 年 11 月にリリースされて以来、わずか 5 日間でユーザー数が世界中で 100 万人、2023 年の 1 月には 1 億人を越えたそうです。最近では国内のメディアでも様々に取り上げられ、高難度の国家試験で合格点を獲得したなどその驚異的な能力が話題になっています。もちろん、このツールの登場によって広がる新たな可能性だけでなく、数多くの弊害も同時に指摘され始めています。当会の多くの会員の間でも真っ先に議論になるだろう、または既に議論になっている問題は、学生のレポート課題をはじめとする教育への影響でしょう。ChatGPT にレポートのテーマやキーワード、文字数などの諸条件を指示すれば、非常に自然な言葉でもっともらしいレポートが一瞬で完成してしまいます。しかも、その内容は既存の Web サイトなどをコピー・ペーストしたのではなく新たに生成したものですから、従来の剽窃チェックツールなども機能せず、教員にとっては全く脅威的としか言いようがない訳です。现阶段では、確かに、その論考の深さや緻密さの点で決して質が高いとは言えないのですが、学部生のレポートとして及第点を得られるレベルですし、今後の発展も凄まじいスピードで進むでしょう。実際に、Microsoft の Bing や Google の Bard などの対抗馬も続々と登場してきています。なお、余談ですが、あるトピックに関する文献案内を指示したところ、実在する研究者の名前を用いて、その人がいかにも書い

ていそうな、しかし全く実在しない論文のタイトルを捏造し、おまけにその要旨までも合わせて回答してきたことには驚きました。

もはや頭の痛い問題としか思えないこの AI チャットボットですが、本フォーラムではこのツールが私たちの古典研究にとってどのように有益でありうるのかという積極的な側面を中心に、私の方からまずいくつかの具体的な応用例を提示した上で、会場のみなさまと広く意見交換できればと思っています。

デジタル技術を活用した研究状況：利点と課題と不安

河島 思朗（京都大学）

デジタル・ヒューマニティーズという言葉を目にするのが多くなった。コンピューターやデータを積極的に用いて新しい研究に結び付ける事例や、資料データベースの構築、ビッグデータの活用など、たくさんの利用法が提示されている。2020 年頃からつづく新型コロナウイルスの影響化で、オンラインの研究会やハイブリッドで学会が開催されるような状況のなか、デジタル技術の活用は劇的に加速しているように思われる。

本発表では、専門的なデジタル・ヒューマニティーズの先進的な活用術ではなくて、現在わたしが利用している範囲に焦点をあてたい。おそらく多くの西洋古典研究者が使っている程度だろう。たとえば、インターネット上に公開されているギリシア語・ラテン語の原典、辞書、論文、写本などのデジタルアーカイブの利用、オンラインによる研究会の開催、SNS の活用による情報交換などである。これらの技術は研究の推進になくてはならないものとなっている。

新しい技術の利点はとても大きい。たとえば先述のようなオンラインでの研究会の開催には多くの利点があるように思う。もちろん対面で議論するほうがより良い場合もあるが、さまざまな要因で参加できないという不利益を解消する手立てになっている。またデジタルアーカイブの活用は研究の推進に大いに貢献している。インターネットの利用で国内外の研究者との情報交換も容易になった。その一方で、課題や漠然とした不安もある。研究それ自体はデジタルのおかげで容易になったと思うが、情報過多の状況のなかで選別の労力が大きくなっていると言えるかもしれない。あるいは情報格差の問題は現在も起こっているし、今後ますます大きくなるだろう。またデジタルに依拠した研究成果の発表や保存には、利便性が大きい反面、不安も感じる。

本発表では、わたしの活動範囲のなかにあるデジタルの利点に触れながら、その陰に感じている課題や不安について提示することで、議論を喚起することを目的とした。